

元少年兵の戦争への道と体験

山門郡三橋町

石橋 重喜

昭和12年7月7日、中国の蘆溝橋では日中両軍が衝突し戦争に突入した。いわゆる日中戦争の始まりである。このとき私は小学校3年生だった。戦争が始まったことを私に教えてくれたのは6年生の友達だった。「オイ、中国との戦争がまた始まったぞ、日本が負けるかもしれないと親父達が話していたぞ」と話してくれたので、私は走って家に帰り祖母に尋ねた。

当時家にはラジオはなかったときだったので、祖母は戦争のことは全く承知しておらず、「また戦争が始まったか」と心配そうな顔で「イヤじゃねー」と言ったまま夕食のためのジャガ芋の皮をむき続けたが、包丁を持った祖母の手先の震えが止まらなかったのを今もはっきり覚えている。戦争突入当初は戦果があると、提灯行列や旗行列と慶祝の行事も続いていたが、暫くすると戦死者の遺骨も還ってくるようになり、出迎えや村の葬送式と状況も一変し、子供心にも悲しかったのが今も浮んでくる。

昭和16年、日中戦争も4年目に入り、この年尋常小学校も国民学校と改称された。私もこの年高等科に入学した。授業の課目のなかには農業という課目があり、生徒全員が自分が使う鋤を卒業するときまで学校の倉庫に保管しておかなければならなかった。当時は農家の働き手は殆んど戦地に行っていたので、出征兵士の家族の田を学校が受け持って米、麦を作っていた。クラスにも受け持ちの田があり、夏は田の草取り、ガンヅメ押し、水車踏み、また肥料として便所の汲み取り、馬糞拾いと本当にいやな勉強が多かった。特に辛かったのはパンツ1枚、炎天下での田の草取りだった。流れる汗も泥手で拭くことができず、また稲の葉先で目を突き涙を流しアブに刺されながらの悪戦苦闘の勉強だった。また、夏休みには宿題として馬草刈があった。中国戦線には多くの軍馬が戦争に参加していたので、軍馬の飼料として乾草の提出が宿題の一つだったので、朝の涼しい時に草を刈り、天日で乾燥させ、夏休みが終わると学校まで汗を流しながら宿題を担いで行ったことを今も忘れない。

夏休みが終わると今度は稲の取り入れである。農家の人手不足は年毎に深刻さを増し、非農家出身の生徒達は農繁期の奉仕作業に参加せねばならなかった。最も思い出に残るのは、隣村の有明干拓にある田圃の稲刈りだった。朝7時に家を出ても歩いて行けば目的地に到着するまでには約1時間の行程、数人がまとまってワイワイ話しながら行くので我慢することができたものの、1人で行けと言われたら恐らくズル休みしたであろう。また、目的地に着いて驚いたことはさすがに干拓地だけあって、その田圃の広さだった。到着すると待ってましたといわんばかりに稲刈鎌が渡され、刈り始めても田圃の端に届くまでには幾度となく立ち上り、腰を伸ばしながらの奉仕作業を取り入れが終るまで続けなければならなかった。

農家では秋の取り入れも終り、また我々の奉仕作業という苦しい勉強が終ってほっとしたのも束の間、昭和16年12月8日の太平洋戦争への突入である。その日は早朝からラジオで臨

時ニュースが繰返し放送され、学校に行っても校内放送のスピーカーからは臨時ニュースが流され続け、拡声器のスイッチは終日入れたままであった。そのときの状況は今も脳裏に焼き付いている。

昭和17年、私も国民学校高等科2年に進学した。太平洋戦争突入以来日本の戦局は日毎に不利となり、村の戦死者の数も増えて行った。日中戦争以来、村の戦死者の写真が額に納められて講堂の両側の壁に掲げられていたが、その数も戦争の進展と共に増え続けるばかりだった。この年の夏休みも終わると、進学か就職かの聞きとり調査が学校側から行われた。満蒙開拓団、軍需工場、海軍志願、国鉄、私鉄等と職種もいろいろとあったが、私は先輩達のように海軍の予科練を受験することを担任の先生に申し出た。先生は「お前は長男で家の跡継ぎだから、両親とよく相談してこい」と言われたので家に帰ってから両親に打明けたところ、「どうせいつかは軍隊に入隊しないといけない時代だから、弟も2人いるのでお前の希望通りにせよ」と半ばあきらめたような返答で許してくれた。翌日学校に行き先生に許しを得たことを報告すると共に、昼休みには役場の兵事係で志願票を受領し、必要事項を記載して提出した。11月に入ってから予科練の第1次試験が柳川町のお寺で行なわれた。同級生等数名が受験したが結果は合格してしまった。

第2次試験は昭和18年1月下旬、佐世保の海軍航空隊で約1週間泊り込みで受験をしたが、試験の結果予科練には不合格だったものの少年電信兵として採用されることになった。

3月に学校を卒業すると、8月に佐世保海兵団に入隊するまでの約4ヶ月間は、昔海軍に勤務経験のある村の先輩達から海軍についての教育や指導を受け、また青年学校の裁縫の先生からボタンの着け方や靴下の修理等について教えて貰い、8月10日佐世保海兵団に入隊した。そうして、3日後には山口県防府市の海軍通信学校に入校し、少年電信兵が誕生したのである。このときの年齢は満14歳だった。

通信学校での教育は8ヶ月間であったが、日夜の厳しい訓練にも耐え抜き翌19年3月に私は卒業してそれぞれ艦船勤務に、また南方や大陸の第一戦に出発することになり、校長以下後輩達の見送る中を隊列を整えて行進した。行進の一步が死地に近づく一步であることも忘れて勇躍旅立ったのである。私は佐世保で駆潜特務艇の電信員として乗組み、佐世保を母港として勤務していたが、10月になって艇が台湾の警備府所属となったので台湾の高雄に出発しなければならなかった。このことを家に連絡したので母と姉が佐世保まで面会に来た。当時の戦況は極めて不利な情勢にあったので自分もやがて海の藻屑になるだろうと思い、形見のつもりで郵便貯金の通帳と腕時計をはずして母に渡すとき、震える母の手先と、涙をこらえた悲しそうな母の顔は今も忘れない。

台湾の新任地に着いた11月から、翌年8月15日の終戦までの9ヶ月間と言うものは、筆舌では表現できない悲惨と苦しみ連続だった。艇の沈没と共に生命まで落とそうとしたこと、洞窟での生活、赤痢とマラリアに冒されたこと、21年の4月までは中国軍の捕虜としての生活、復員するときのお土産にはマラリヤを持ち帰るなど本当に大変な少年時代だった。

あれから50年、生還した少年電信兵達もやがて70才を迎えようとしているが、今日までの50年間、1日たりとも忘れることができなかったのは、同期生737名中272名が僅か15、6才で戦死したことである。戦争で子供を失なった当時の親の気持ちを今静かに考えると残念でならない。これからも戦争の惨禍を忘れることなく戦争を防止し、平和を守り続けるために余命を捧げ尽くしたい。